

令和 6 年度入学選抜（内部進学選抜）　＜小論文＞

下記に示す文章ⅠおよびⅡを踏まえ※1、心理職者が子どもの自殺ハイリスク者への支援に役立つために必要なことについて、具体的な例を交えながら論じてください。

※1　自分の意見のもとになる部分（ⅠおよびⅡに示される文章表現）を示しながら論を展開してってください。

※2　800字～1000字の範囲で作成してください。

＜文章Ⅰ＞以下は、児童生徒に対する自殺予防教育プログラム（GRIP）の開発経緯に関する文章です。

クラスでの授業として実施する場合、自傷経験や自殺念慮を持つ、いわゆる自殺リスクの高い子どもたちと、そうした経験のない子どもたちがともに取り組める課題にする必要がある。しかしながら、リスクの高い子どもたちは援助希求欲求が低く、また大人に対する不信感を抱いていることが多い。そうした子どもたちがいる中で、安易に「自殺はよくない。」「大人に相談しましょう。」とメッセージを投げかけることは、メッセージとは反対に彼らの不信感を高め、相談行動を抑制してしまう恐れがある。他方で、これまでそうしたことにほとんどあるいは全く接してこなかった子どもたちには自殺という行為が理解し難く、取り組みにくさを招くかもしれない。それは「自殺はいけない。」という、子どもたちの発話となって表れ、それがまたリスクの高い子どもたちとそれ以外の子どもたちとの距離を広げてしまうのである。ではリスクの高い子どもを選別し、それぞれのグループに対して授業を実施することが有益であるかというところでもない。子どもは子ども同士で相談し合うことが多い（Hawton, Rodham, & Evans, 2006 松本・河西監訳 2008）とすれば、それは子ども同士の関係性に閉じることを助長させるかもしれないのである。例えば以下はある中学校での自殺予防教育を実施した後に寄せられた感想の一部である。

「自殺しないで」ってもちろん大切だけど、そうやっていうのは何か違う気がする。

相談し合うなんて、机上の空論だと思う。きれい事だ。

こうした反応は往々にしてリスクの高い子ども、例えば自傷している子どもや虐待を受けている子どもから生じやすい。「大人こそ信頼できない。」と思っている。また生徒がストレス状況への対処として自らを傷つける背景には、「親や友達に迷惑をかけたくない、話しても仕方がない」といった、相談に対する心理的な壁があるだろう。そうした背景を考慮することなくたんに伝え方を練習するのはむしろ逆効果でしかない。自殺予防教育はこうしたリスクの高い子どもにこそ届けられるべきものであるが、単純に「大人に相談しましょう。」ではうまくいかない。「子どもたちだけの関係に閉じないようにしたい」が、「大人に相談しない、大人を信頼できない」ことが自殺予防教育を実施する上での大きな障壁になっていたのである。

出典：川島大輔（2019）学校での自殺予防教育の現状と今後の課題—GRIPを中心に、社会と倫理 34 49-58.

<文章Ⅱ> 以下は、子どもの自殺予防について援助希求という点から問題提起している文章です。

近年、子どもの自殺予防において、「援助希求能力を高める」とか、「SOS の出し方を教育する」といったスローガンをよく耳にする。

たしかに自殺リスクの高い子どもに共通するのは、援助希求能力の乏しさだ。たとえばある種の自殺ハイリスクな子どもは、リアルな人間に相談したり助けを求めたりする代わりに、カッターナイフの痛みをもってこころの痛みから意識を逸らし、過量服薬によってこころの痛みを麻痺させて、かろうじて現在を生き延びている。

何も自殺リスクの高い子どもにかぎった話ではない。むしろ援助希求の乏しさは、年代を問わず、そしてまた自殺予防にかぎらずに、依存症支援や虐待防止、犯罪被害者支援、地域精神保健福祉といった、さまざまな領域の支援困難事例に共通する特徴だ。その意味では、人生早期の学校教育においてSOSの出し方を教え、援助希求能力を育むべきだ、という発想自体が必ずしもまちがっているわけではない。

だが、忘れないでほしいのだ。もしある人の援助希求能力が乏しいとするならば、そこにはそうなるだけの理由がある。その人は、内心、助けを求める気持ちがありつつも、それによって偏見と恥辱的な扱いに曝され、コミュニティから排除され孤立するのを恐れてはいないだろうか。あるいは、成育歴上の逆境的体験のせいで、「世界は危険と悪意に満ちている」「自分には助けてもらうほどの価値はない」「楽になったり幸せになったりしてはいけない」と思い込んではいないだろうか。だとすれば、彼らは援助を求めない。こちらから手を差し伸べても、拒絶されるのは当然だ。それどころか、みずから助けを求めておきながら、突然、翻意して背を向けることさえあるだろう。

そもそも、誰かに助けを求めるという行為は無防備かつ危険であり、時に屈辱的だ。冒頭に述べた死にたいくらいつらい現在を生き延びるために、自傷や過量服薬を行っている子どものことを考えてみるとよい。一見、彼らはカッターナイフや処方薬・市販薬に単に依存しているように思えるかもしれないが、実はそうではない。問題の本質は、カッターナイフや化学物質という「物」にのみ依存し、「人」に依存できないこと、より正確に言えば、安心して「人」に依存できないことにあるのだ。

こういうと、「人に依存できないのならば、私に依存しなさい。なんなら共依存でもいい」と申し出る、おせっかいな支援者がいるかもしれないが、それはとんだお門違いだ。安心して「人」に依存できない人たちは、「この人、私のことをはじめて理解してくれた」と思わず感激するような依存対象と出会った瞬間に、「この人を失望させたくない、嫌われたくない」という不安から「バッド・ニュース」が口にできなくなり、相手が喜びそうな「グッド・ニュース」ばかりを話すようになる。つまり、本音がいえなくなるのだ。

あるいは、「この人も私を裏切ったり、見捨てたり、突然、豹変して怒りだしたりするのではないか」という恐怖から、相手を試し、振り回し、しがみつく。その結果、疲弊した相手は去ってしまうのだ。まさに、「石橋を叩いて渡る」ならぬ、「石橋を叩いて壊す」のである。

出典：松本俊彦編（2019）「助けて」が言えない SOSを出さない人に支援者は何ができるか、日本評論社。